

来年度造血幹細胞移植関係予算 概算要求の概要

造血幹細胞移植に関する来年度予算の概算要求の概要が明らかになりました(資料入手日9月11日)。総額は18億6千9百万円で、今年度予算比較で1億6百万円の増額となっています。

骨髄移植推進財団への補助金では、新たに「非血縁者間末梢血幹細胞移植の導入に係るシステム構築費」が計上されています。非血縁者間末梢血幹細胞移植については、現在導入に向けて財団内の「PBSC Tに関する委員会」で検討が行われています。財団は来年度中の導入を目指すとしていますが、システム構築費が来年度予算の概算要求に計上されたことで、厚生労働省も早期のPBSC T導入を前提としていることが窺えます。

このほか「骨髄提供登録者フォローアップ事業」に関する予算がほぼ倍増となり、「骨髄バンクドナー募集広告経費」も倍増となっています。骨髄バンクの普及啓発広告については、

■平成22年度移植関係予算概算要求の概要 (臓器移植対策室)

	概算要求額	前年度予算額
造血幹細胞移植対策	1,869百万円	1,763百万円
I. 骨髄移植対策	1,214百万円	1,137百万円
<概要>		
(1)骨髄移植対策事業費 (骨髄移植推進財団)	487,924千円	440,719千円
・あつせん業務関係事業費	341,814千円	345,288千円
・あつせん事業体制整備費	54,022千円	8,617千円
【新】非血縁者間末梢血幹細胞移植の導入に係るシステム構築費	42,000千円	0千円
【改】骨髄提供登録者フォローアップ事業	9,126千円	4,788千円
・普及啓発事業	88,184千円	82,910千円
【改】骨髄バンクドナー募集広告経費	10,500千円	5,250千円
・運営管理費等経費	3,904千円	3,904千円
(2)骨髄データバンク登録費 (日本赤十字社)	726,523千円	696,576千円
【改】HLA (A座、B座、C座、DR座) 検査費	495,075千円	462,788千円
(3)医療提供体制施設整備交付金 (医政局指導課計上) (特殊病室施設)		
II. さい帯血移植対策	655百万円	625百万円
<概要>		
(1)さい帯血移植対策事業費 (日本赤十字社)	655,140千円	625,221千円
・さい帯血保存管理業務費	617,226千円	586,848千円
【改】さい帯血の採取及び検査に係る経費	599,561千円	568,865千円
・さい帯血情報管理経費	34,941千円	35,335千円
・日本さい帯血バンクネットワーク運営会議費	2,973千円	3,038千円
(2)保健衛生施設等設備整備費 (健康局総務課計上) (さい帯血バンク設備)		

【追記】本稿準備中の9月16日、

「もつとクロスしよう」とる人、つくる人、つかう人」をテーマとしたパネルディスカッションでした。「とる人」(採取施設)からは、アンケート回収を増やすために、乳幼児検診を病院負担で行っていることが、「つくる人」(さい帯血バンク)からは、採取施設の要望に応じて休日の調製保存を始めたことが、そして「つかう人」(移植施設)からは医療コーディネーターの存在が医師の事務作業量を軽減し、それにより患者と向き合う時間も増し、患者が安心して治療を受けられる環境が確保されることと報告されました。関係者の熱心な取り組みにより、さい帯血バンクが大きく育っていることを実感したひとときでした。

夕方からの記念式典には、悠仁様ご出生時にさい帯血を提供された秋篠宮殿下ご夫妻がご臨席され、殿下よりご祝辞をいただきました。



初日最初のプログラムは「もつとクロスしよう」とる人、つくる人、つかう人」をテーマとしたパネルディスカッションでした。「とる人」(採取施設)からは、アンケート回収を増やすために、乳幼児検診を病院負担で行っていることが、「つくる人」(さい帯血バンク)からは、採取施設の要望に応じて休日の調製保存を始めたことが、そして「つかう人」(移植施設)からは医療コーディネーターの存在が医師の事務作業量を軽減し、それにより患者と向き合う時間も増し、患者が安心して治療を受けられる環境が確保されることと報告されました。関係者の熱心な取り組みにより、さい帯血バンクが大きく育っていることを実感したひとときでした。



同時に通訳と格闘しながらも、ヨーロッパの成績や複数さい帯血移植の有効性など勉強になりました。日本からは、東大医科研の高橋先生より非血縁者間移植

2009年度賛助会員 (8月24日~9月15日)	
アステラス製薬株式会社	50,000円
尾西ライオンズクラブ	10,000円
徳島藍ライオンズクラブ	20,000円
森山 久	2,000円

翌日は、「10年目の課題」をテーマに、市民公開シンポジウムが開催されました。移植数が年間900例を越え、成績も向上し、事業としては順調に進んでいるように見えますが、恒常的な赤字体質や品質の標準化等の諸問題を抱えながらの運営であり、バンクの苦悩する姿を垣間見た思いです。法整備や移植データの一元化、患者擁護の観点での情報提供など、これからのさい帯血バンクの取り組みむべき課題をみんなで考えました。

最後のプログラムは、さい帯血移植を世界で最初に成功させたエリアヌ・グルックマン博士(仏)ら、さい帯血移植医療をリードする日米欧の5人の専門家を招いての国際シンポジウムでした。

「もつとクロスしよう」とる人、つくる人、つかう人」をテーマにしたパネルディスカッションでした。「とる人」(採取施設)からは、アンケート回収を増やすために、乳幼児検診を病院負担で行っていることが、「つくる人」(さい帯血バンク)からは、採取施設の要望に応じて休日の調製保存を始めたことが、そして「つかう人」(移植施設)からは医療コーディネーターの存在が医師の事務作業量を軽減し、それにより患者と向き合う時間も増し、患者が安心して治療を受けられる環境が確保されることと報告されました。関係者の熱心な取り組みにより、さい帯血バンクが大きく育っていることを実感したひとときでした。



解凍名人によるさい帯血解凍デモンストレーション

骨髄バンクの最新情報をお知らせする

(財団マンスリーレポート (9月15日発行)より抜粋)

●コーディネートの状況と対策について
9月10日開催の常任理事会で、現状と対策について審議されました。本年1~6月における国内患者登録数は995例で前年同期比111%、特に50歳以上が416例で同123%と大きく増加、移植例数は568例、採取件数は566例と共に前年同期比106%でした。4月~6月のコーディネート期間については、確認検査行程は25.0日(前年同期24.0日)ドナー選定から骨髄採取までは74.0日(同71.0日)、コーディネート開始から骨髄採取日までの行程が127.0日(同119.0日)で、いずれも前年に比べて延長しています。特に関東地区のコーディネート期間は前年に比べ11日延長し、主な原因として骨髄採取の受け入れが困難なためと考えられます。以下、対策案(抜粋)です。

○造血細胞移植学会と協力して、ドナー安全管理料として診療報酬の増額を働きかける(要望済み)。
○1施設あたりの骨髄採取受け入れ数が違うことについて、その原因を探る。より骨髄採取を受け入れてもらえるような調整のあり方について、財団各部および地区事務局間で、各地区の工夫などの意見交換を行う。また、骨髄採取の調整に関してどのような協力体制が取れるか、財団職員と院内コーディネーターとの意見交換を行う。
○院内コーディネーターが、非血縁ドナーの骨髄採取受け入れ時に院内調整等に協力できるよう、財団から採取施設に対して要請する。

骨髄バンクNOW

●政府広報番組で骨髄バンクが取り上げられます
10月は「骨髄バンク推進月間」ですが、これに合わせて政府広報番組で骨髄バンクが取り上げられます。詳しくはそれぞれのホームページをご覧ください。地域によっては放送(曜)日が異なる場合がありますので、ご確認ください。

<テレビ> ■ご存じですか (10月9日放送)
■中西哲生のJust Japan (10月10日放送他)
<ラジオ> ■栗村智のHAPPY!ニッポン (10月24日放送)

●計報
8月30日、財団の常任理事である町田圭治氏(株式会社ケーティーピー常務取締役)が心筋梗塞のため逝去されました(享年70才)。ご冥福をお祈りいたします。

●第2回目、第3回目「PBSC Tに関する委員会」の開催
8月15日および9月13日に第2回目、第3回目の委員会が開催されました。第2回委員会では、「顆粒球コロニー刺激因子(G-CSF)投与について」

◆日本骨髄バンクの現状(平成20年8月末現在)			
	7月	8月	現在数
ドナー登録者数	2,731	2,941	343,923
患者登録者数	213	203	2,649
骨髄移植例数	122	91	—
20歳未満ドナー登録者	—	123	10,425*
51歳以上ドナー	223**	89**	15,742**

■8月の区分別ドナー登録者数: 献血ルーム/978人、
献血併行型集団登録会/1,883人、集団登録会/2人、その他/78人

注) 数値は速報値のため次月以降に訂正されることがあります。
*1) 17年3月~ *2) 51歳以上ドナーの延長数 *3) 51歳以上ドナーの新規登録数
*4) 17年9月~

全国協議会財政への ご援助をお願いします

私も全国協議会の運営資金は、皆様からの善意のご寄付によって賄われております。しかしながら長引く不況の影響もあって、このところ資金不足に悩まされています。

私たちは設立以来19年間、全国のボランティアとともに微力ながら患者さんの支えとなる事業に取り組みまいました。

状態は、会場におられた患者さん方の目に、とても頼もしく映ったことでしょうか。

骨太な企画が満載の大会であり、来年20周年を迎える全国協議会の記念大会の企画を考えるうえでも、とても参考になった大会でした。(黒川)

身の丈にあつた活動をすべきとのご意見もいただいておりますが、移植件数の増加を上回る患者数の増加という現実がそこにある以上、患者支援の面でも、また普及啓発の面でも、事業の拡大は必然であると考えます。

真に必要な事業を見極め、資金・資源の有効活用を図ることは言うまでもありませんが、患者さんを取り巻く環境が未だ改善されない現状においては、なお一層、事業を推進しなければならず、これを支える財政基盤を確保しなければなりません。皆様のお力添えをお願いします。